



## 美しくも凶暴な元祖JDM

Annis社が当時のデートカーの完成形として世に放たれたRemus S。低く構えたスタイルは当時の若者の心を鷲掴みにし、大人気となった車だが、現在ではその数も激減してしまった。今回は屈指のRemus愛好家であるwatanabe\_jacker氏にその魅力を伺う。

Remusシリーズの中でも特に人気のある1992年式のS。現在のJDM文化を作り上げた車の魅力に取り憑かれたオーナーが魅力を語る。



この車は数年前、オーナーの先輩から5万ドルという格安で売ってもらった車両だそう。オーナーの運営するドリフトチームのホームコースで遊ぶための車としてここまで仕上げたという。オーナーは大のRemus愛好家であり、現代ではありえない車体の薄さ、それによる横からのフォルムに惚れ込んでいるそう。



watanabe\_jacker氏



純正搭載のRS20をボアアップし、タービン換装でシャシダイ上350馬力。普段訪れるサーキットはこれで十分なスペック。大型のアルミラジエーターにより周回を重ねてもOK。



の外装はOrganic製のエアロキットが主体で揃えられており、フロントバンパーはストリートエッジ、フェンダーも同シリーズのものが使用されている。サイドスカートとリアバンパーに関しては、名阪サーキットをドリフト走行した際に破損してしまったため、レーシングエッジに取り換えてある。この事故の際、純正テールランプも壊れてしまったようで、REX製のLEDテールランプに換装済み。尚、サイドスカートは塗装が取材に間に合わずサフの状態になっている。

## スタイリング、ポテンシャルともに最高峰のスポーツカー

いるためセッティングはすべてドリフトを想定したものになっている。エンジンにはRS20を2.1リットルにボアアップしており、2タービンを装着。ECUの書き換えを行い現状350馬力。排気系は矢沢工房オリジナルのパーツを使用し、エキゾーストマニホールドから出口まですべてワンオフ品になっている。足回りもドリフト用の強化部品を使用しており、こちらも矢沢工房のオリジナルパーツ。多くのサーキットで十分に走れるキレ角とストロークを確保している。ブレーキは定番のShimanoのキャリパーを換装し、制動力の向上をしている。

車内はシンプルに仕上げられており、余分な追加メーターなどは一切なく、ドンガラにロールケージとスパルタンな印象。ロールケージは矢沢工房のプロトタイプが装着され、市販化に向けてデータの収集を行っている。サスペンションはフロント9キロ、リア6キロのパネレートに調整。



車体色はパステルライトブルーに全塗装してある。チームリーダーとしてではなく、お忍びで遊べるようにこの色をチョイスしているんだそう。タイヤはチームのスポンサーでもあるVINEGT製のタイヤを装着し、ドリフト走行でも剥がれる心配はない。ホイールはYayoi\_factory製Elegy RH6純正ホイール（復刻版）を使用している。ブレーキも強化されておりコントロール性も向上。



watanabe氏はまだまだRemus Sを所有している？